《入選》

安心安全な水を届けるために

大阪府　大阪教育大学附属池田中学校　1年　松井（まつい）　紗楽（さら）

最近、無人島でのサバイバル番組が人気を博している。内容は出演者が無人島で生活していくためにそれぞれ知恵や道具を使い、最終的に島を脱出していくというものだ。多くの挑戦者は島についてからまず最初に森の中に入り水を探す。そして森の中で見つけた水溜まりの泥水をあらゆる方法でろ過し、ようやく得られた少しばかりの水を飲む。そんな様子がよく見られる。私はその場面を見て面白いと思う反面、これだけの時間と労力をかけてもわずかな水しか得ることができないことに驚いた。またそれとともに私は未だ多くの国でろ過をしないまま川や池から得た水を飲んでいる人がいることが頭に浮かび、何だか複雑な気持ちになった。

先程述べたように、世界では衛生的でない水でさえも簡単に手に入れることができない国がある。そのうちの一つがアフリカ大陸の西部に位置するナイジェリアという国だ。

ナイジェリアは日本の約二・四倍の国土があり、人口は約２億人。世界で第七位の人口を誇る国である。また、南アフリカ最大の経済大国とも呼ばれている。しかしそんな経済大国ナイジェリアは一つ大きな問題を抱えている。それは「水問題」だ。ナイジェリアが抱える水問題は大きく二つある。一つは、場所によってはインフラが整備されていないため、わざわざ遠いところまで水を汲みに行かないといけないことだ。水を汲む仕事の大半は女性や子どもが担っている。そのため、子どもたちは教育を受ける機会をうばわれているのが現状である。もう一つ、彼らはその汲んできた水をきれいにして飲んでいるわけではない。ろ過をする知識が広く普及していないため水をそのまま飲んでいるのだ。日本では社会科の授業で浄水場や下水処理場の仕組みについて学ぶが、ナイジェリアでは水の処理の教育はおろか、教育を受ける機会が少ないため水に関する公教育も不十分である。アフリカやアジアにはナイジェリアと同様に安全な水にアクセスできない国が多くあるのだ。

そして世界でも有数な質の高い水を誇る日本も水問題と決して無関係なわけではない。日本は高度経済成長期に上下水道などのインフラの整備を進めてきた。しかし、建設から五十年以上が経ち老朽化が進んできている。これから先、老朽化したインフラを新しく作り変えるために年間約５兆円がかかると言われている。日本では年々人口減少が問題になってきており、私達が大人になる頃には更に人口減少が進んでいるだろう。これからこうしたインフラを維持していくのは他でもない私達であり、未来の社会資本のあり方が問われているように思える。

いつも蛇口をひねれば安全な水道水を飲めるということが当たり前でない国があるということ。また、安全な水を簡単に手に入れられるということは、実は安心して生活する上での基本となることなのだと思う。だからこそ日頃から何気なく安心安全な水を飲むことができることに対して、改めて感謝の気持ちを忘れず日々過ごしていこうと思った。インフラを整えることは衛生上の問題を改善するだけでなく、子どもたちが労働でうばわれていた時間を教育のために使えるようにすることができると思う。私達が直接できる事は少ないが清潔な水やトイレを届ける、現地の人に知識を教えるといった活動を行っている団体へ寄付をするなどの小さなことからでも行動していきたい。より多くの人に安心安全な水を届けるために。